夕刊フジ　2022 年 1 月 15 日（14 日発行）

ニッポン臨終図巻

ドクター和の

(238) 脳外科医・杏林大学名誉学長　竹内一夫

学ばせていただいた「脳死とは」

今週アメリカで、ブタの心臓を50代男性に移植したという報道には驚きました。ええっ？　豚のハツなら尼崎の居酒屋で1串120円で食べ…いや、その話はやめておきましょうか。移植された心臓は、人間に拒絶反応が起きないよう遺伝子操作をした特別なブタの心臓だったとか。

臓器移植もここまできたのかという称賛の声とともに、人間が命のタブーに踏み込んだと問題視する声も上がっているようです。そんな時代の変化を見計らったようにして、わが国において雑木移植の道筋をつけた脳外科医で、杏林大学の名誉学長であった竹内一夫さんが、昨年12月8日に都内の病院で亡くなりました。享年98。死因は発表されていませんが、大往生であったとお見受けします。

この訃報とともに、今回は当連載で初めて「脳死」について書きたいと思います。世界初の心臓移植が行われたのは1967年。翌年の68年、日本初の心臓移植を18歳の少年に施したのは札幌医科大学でした。メディアは新しい医学の誕生と称賛しましたが、少年は83日目に死去。その後、この手術は倫理的に問題があったと他の医師より刑事告発をされたのです。

これを機に、脳死についての議論が日本でも始まります。欧米各国では60～70年代に脳死は人の死だと認めましたが、日本は独自の死生観を背景に、その考えをすぐに受け入れることはできませんでした。基準がないまま、その後何件か臓器移植をめぐる事件が起こりました。

85年になり、竹内医師が旧厚生省の「脳死に関する研究班」の班長として、脳死の判定基準である〈竹内基準〉をまとめます。世界的に見ても大変厳格であると評価を受けたこの基準に沿う形で、97年、脳死者からの臓器移植を可能とした〈臓器移植法〉が成立します。

しかし、脳死問題に関しては、未だに賛否両論、議論が分かれています。臓器移植によって助かる命がある一方で、臓器提供を決断する側の家族には大きな葛藤が生まれるのは当然です。

この問題を考えるうえで、是非とも読んでほしいのは、ノンフィクション作家・柳田邦男氏が自死した息子さんのことを書いた『犠牲（サクリファイス）　わが息子・脳死の11日』です。脳死＝人の死か？　という問いに、医者は答えを出してはならぬと感じました。欧米の医療制度を追いかけ、模倣することが必ずしも正解とは限らない。そのことを僕は、柳田さんと竹内医師から学んだように思います。

医療が何かを強制することは、あってはならないのです。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。